ふりむきながら続く地図

越境／pen友プロジェクトでの気づき
2019―2020

制作：特定非営利活動法人アートフル・アクション
発行：2021（令和3）年3月20日
発行者：
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
東京都千代田区九段北4丁目1―28　九段ファーストプレイス8階
電話：03-6256-8435｜FAX：03-6256-8829｜www.artscouncil-tokyo.jp

印刷データ作成：松田洋一
ISBN　978-4-909894-23-6　C0070
＊本書は無断複写、複製、転載を禁じます。©2021 npo artfull action
＊本書に関するお問い合わせ先：特定非営利活動法人アートフル・アクション
東京都小金井市本町6-5-3シャトー小金井2階
電話：050-3627-9531｜mail@artfullaction.net｜http://artfullaction.net/

■小金井アートフル・アクション!（小金井市芸術文化振興計画推進事業）とは
「誰もが芸術文化を楽しめるまち～芸術文化の振興で人とまちを豊かに」という理念の実現を目指し、
2009年4月から市内各所で事業を進めています。
2011年度から、東京都、小金井市、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、
特定非営利活動法人アートフル・アクションの四者共催により「東京アートポイント計画」の一環として実施されています。

＊小金井市芸術文化振興計画についてのお問い合わせ：　小金井市コミュニティ文化課文化推進係　電話：042-387-9923
主催：東京都｜小金井市｜公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京｜特定非営利活動法人法人アートフル・アクション

〈越境／pen友プロジェクト〉

◉アーティスト独自の視点を手がかりに、身の回りのもの／ことから導き出される記憶や歴史に丁寧に向き合うための試みとして、越境を主題とした活動を2019年度、2020年度に実施。
◉その具体的な試みとして、小金井市や東京を中心に日本に在住する海外に出自を持つの人々と、アーティストの呉夏枝さんが文通をとおして出会い、交流を深め、その対話をもとに、ワークショップ、そして展覧会へと活動を広げていった。また、アーティストだけではなく、活動に参加した市民が「pen友」プロジェクトを通してそれぞれの越境をめぐって思索した。
http://pentomo.net

◉呉夏枝（おはぢ）：美術作家、在日韓国人三世、オーストラリア在住。主に染、織、刺繍、編む、結ぶなどの技法をもちいた織物、写真、音声などをつかい、言葉にされなかった個人の記憶―沈黙の記憶―をめぐる作品を制作。
◉宮下美穂：NPO法人アートフル・アクション デイレクター

この地図をよまれる方へ

◉2019年暮れから2020年暮れにかけ、越境／pen友プロジェクトが行われました。その間、週一で行われたミーティングをふくめ、みなで本を読み感想を共有し、それぞれの制作や探求、気づきを話し合い、様々な過程をふみながらゆっくりと歩んできました。年代も背景も全く異なる私たち4人はその参加者として、とてもいろいろなところを行き来しました。物理的にも、精神的にも、思考の中でも、過去にも、そしてお互いにも。関わった人たち、手紙、4冊のノート、その中に書かれた文章もふくめ、全てが少しつつ絡み合い、ひとつひとつの存在がにじみでているプロジェクトだったと思います。
◉「ふりむきながら続く地図」は、そういった参加者たちそれぞれのプロジェクト期間中の「行き来」や「探求」のみちすじを、ほんの一部ではありますが、可視化したものです。この地図の制作を最後に一旦私たちが関わるこのプロジェクトは終わりますが、それぞれの生活は脈々と続いていきます。その中で、ふとした瞬間に今回の経験をたどりなおすことがあるのではないかと思います。その度にまた違ったみちすじが生まれ、またいろいろなところを行き来しながら、新たな「地図」が続いていくのだと思います。
◉そんな私たちの歩んだみちすじを、よければたどってみてください。

田副可奈子、野澤佐知子、福島瑞葉、森山晴香（越境／pen友プロジェクト参加者）より

ふりむきながら続く地図
越境／pen友プロジェクトでの気づき
2019―2020

ARTS COUNCIL TOKYO
文化でつながる。未来へつながる。
Tokyo FESTIVAL
特定非営利活動法人アートフル・アクション

ふりむきながら続く地図

越境／pen友プロジェクトでの気づき
2019—2020

文字の色分け
- 全体のできごと
- 福島さんの記録
- 田制さんの記録
- 野澤さんの記録
- 森山さんの記録

福島さんのゆらぎ

田制さんの小さな気づき

野澤さんの発見

森山さん、問い続ける

時間の流れ ▶▶▶

越境／pen友プロジェクト、スタート。

2019.11 午後、呉夏枝（お　はぢ）さんのプロジェクトに関するミーティングに参加。
初めてはぢさんにお会いする。
武蔵小金井の飲策を兼ねてはぢさん、一橋大学の宮地先生、スタッフの松村さん、宮下さんと一緒にシャトーから歩いて油浪泉園へ、そのあと環境学習館へ行く。

自分には何ができるのだろうかと不安もあった。どんなプロジェクトになるのだろう？

「越境」と聞き最初は難民問題などハードな面に関するプロジェクトになるのかと思っていた。

このプロジェクトに参加すると決めたとき

私は元々作家として活動するには例えば「こうしていかなくてはならない」、「ギャラリーに所属して、足場を作っていかなければならない」、といった意識が強く、そういう意識を無くして自分の伸びたいものを作ったのがシャトー2Fで2019年秋に行った個展。
今までプロジェクトベースで人と作品を作ったことがなかった。友人と社会や政治の話をすることはあったが、それをまとめたり、誰かと共有したりすることがなかったので、このプロジェクトではそういった経験ができるのかな、と思い、参加した。

手紙は一対一の親密さが強い。初めての相手はもう少し時間が必要なのでは？

この頃はまだプロジェクトに対してお手伝いをするという感覚が強かった。
完成形がかっちりしないまま進んでいたので、どのような感じになるのか、わからないという状況の中でやれることをやっていくという感覚が強かった。

2019.12 初めてのミーティング。日本にいる海外にルーツのある方ではぢさんと手紙のやり取りをする人を探す。

このプロジェクトで文通を行うと聞いたとき、知らない人と手紙のやり取りをするのは難しいと思った。

ノートにメモが残っている。
**“記憶の地図、で杏事の地図、重層的な地図。
時間と空間をどう経験していくのか、
歴史と自身の日常生活をどう繋げていくのか？”**

2019.12 プライベートが忙しく、**直接ミーティングには参加せずプロジェクトのコミュニケーションツールのStockを通して情報共有させてもらう。**

2020.1 私がフィーさんに、彼女のおばあさんの衣食住についてのインタビューを行なった。

タイから来た私の知り合いの**ウィーさん**に連絡してプロジェクトの説明をしたら、やってもいいと返事がくる。

ウィーさんにオファーしたとき、はぢさんとウィーさんがやり取りを円滑に進めていくにはどうすればいいのか悩んだ。ウィーさんは初対面のはぢさんと自分の内面についての話ができるだろうか、と危惧していた。

（おばあさん）というテーマは、その人のパーソナルな部分も見える。話しやすいテーマだと思った。

pen友になってくれる人を探し始める。海外にルーツのある方、よく行くインド料理屋で働いている女性が頭に浮かぶが、どう声をかければいいのか悩む。「外国人だから、声をかけられたんだ」と思われたらどうしよう。その通りなのだが、何の関係性も築けていない状況で、いきなりこのプロジェクトのことを切り出すのは難しいと感じた。「外国人だから」「見た目が外国人だから」と、外見だけで判断して話おうとしている自分にも違和感を感じた。

2019.11 越境プロジェクトのミーティングに飛び込み参加。

2020.1 宮下さんに、このプロジェクトの骨格を整理してみようといわれ、関をかいてみる。
アーティストとスタッフの関係、参加者とスタッフの関係、小金井の街との関係について考える。

pen友に参加してくれる人を私が見つけた場合、どのようにしてはちさんと繋げていけるのだろう。自分自身のpen友プロジェクトへの関わり方を考えたとき、自分も「文通」の流れの中に入りたいと思った。

はぢさんに、今考えていることを手紙に書いて送る。
書きながら海に浮かぶドリアンのことを考える。

森山さんの問いのみちすじ

20200221
マレーシアに住んでいた頃の話。
修学旅行でサンダカンへ行った。
そこは日本軍が太平洋戦争時に「死の行進」を行った場所だった。
そのことを扱う博物館に入る前、先生は私に、「ここには日本人の戦犯の話や、写真が並べられている。嫌な人らなくていい」といった。入ることにした。

例えば、日本が他国の人に行って者た残虐な行為、それについての作品を見たとき、自分がどういうスタンスで、その事実、その作品に向き合うべきなのか、その作品を見て、感じてなったり、感傷的になったりする権利は自分にはあるのか、それを見て、感じることは良、それを見ずしている、ということに葛からないのか。そういった作品やその背景などを見て、考えなくなる、という自分の感情の葛藤を、きっと自分で分析しなければいけないんだと感じる。思いはいただいた思いについてなく、その後ろには様々なものが混んでいたりする、それこそ同情とか。

20200325
東京オリンピックが延期となった。
オリンピックなんてやらなくていい、そういう人たちの声を日々聞いていた。
なくなったわけではないが、オリンピックは今年開催されない。
駅前にある、オリンピックまであと何日、と表示されたカウンターは昨日から数字が止まったままだ。
オリンピックなんてやらなくていい、といっていた人たちは喜んでいるだろうか。

20200417
人と会うことができない中で何ができるのか。
ベルリンで出会った韓国出身の友人から連絡が来た。
彼女は日本語が少し喋れる。私たちは毎回、日本語とドイツ語を混ぜて話をしている。
通じ合わないことも多々ある。
彼女は普段玉に住んでいて、そこが今どうなっているのか気になるという。私はいま目本で、彼女はいま目イツ、コロナのことをおり、しばらくこちらには戻れない。電話がなかなか繋がらないこと、一緒にその場所に行けた面白いかも、という話になった。
そのあと、私も通して過去の家へいくということ。

20200423
友達の曾の家を訪ねること。
そのA夫妻も通していくこと。
私が夫にT行くということ。
これは友達の話だが、私の話として展開していくことが可能。
友達の記憶だが、今回の経験は私のものになる。「私が聞いた話」になる。
私がこの話をさら聞くが、どう変容していくのか。
友達の経験だが、友達はそこには不在。生まれる関係性。

小野和子さんのいう、「物語の採話」。
自ら所由からの下ではなく、向こう側に預ける。話される相手に何かを委ねる。
2重構、二人羽織、見る主体の、見られる目で構成されている。
プライベートなことだけれど、他者との関わりが生まれることで、それは社会性を帯びる。その視点をどう見つけられるかがとても大事。友達の過去を、ただノスタルジックに回想するだけではない何かにつなげる。

友達の曾の家は埼玉にある。
田舎ではなく、都会でもない、東京近郊の象徴について考えてみる。

清野智子さんという、パブル期の写真家がいらっしゃと宮下さんに聞いた。
彼女の写真には空漠としたものが堆積している。
ものすごい密度のアンバランスさが見える。
小金井、埼玉、いろいろな国ふ、独特な文化圏だと思う。
真ん中より現代日本を象徴することが多い。

今、緊急事態宣言中に埼玉に行くことに関して。
危険を おかしてまで、とはいわないが、車に乗るなどして工夫しながら現地に行ってみることはありがもしれないと宮下さんにいわれた。この中で移動することについて、当たり前のように「それはダメなこと」と考えていたが、再考してみようと思った。

20200522
（パブル期基本情報）

パブル期→大体1986年～1991年
パブル期はその最中もパブル期と呼ばれていたのか？

母は1963年生まれ。パブル期は20代だった。今の私と同じくらい（今はT コロナ期？コロナ世代？未来ではそう呼ばされて呼ばれるのだろう。）
私はパブル期を知らない。想像するできない。そのときにしか感じられない、独特な空気感があったと聞いた。どんな空気だろう。

越境／pen友プロジェクト、スタート。

（新しい仕事がはじまる。）

2020.1（プライベートで抱えていた大きな問題がおおよそ片付く。）

2020.2（コロナの影響で母との直接の面会ができなくなる。街中でもマスク姿の人が多くなる。）

2020.3（職場でも、そろそろコロナ対策の話が出てきた。在宅勤務へのシフトを考えての準備が始まる。店にマスク、トイレットペーパーの在庫がない。パンデミックという言葉を初めて聞く。朝の通勤電車、母のことなど心配。）

（車も減り少し空気が綺麗になったような気がする。
緊急事態宣言が出される。
4/9より完全な在宅勤務がスタート。）

2020.4「越境」のスピンオフプロジェクトとして参加者が作品を制作することとなったので参加してみてはどうか？とお話をいただく。

このプロジェクトにすでに深く関わってきた他の方々との時間差、温度差を埋めることができるのか？

不安がある。
自分には何ができるのだろう？

（5月末に緊急事態宣言解除が解除されたことで、職場に少しずつ出勤するようになる。）

2020.5 あと追いの形でみなさんのミーティング内容をStockにて見ている。

文通という形でのプロジェクトがこのコロナに翻弄される私たちに新しいコミュニケーションの形を示してくれているように思う。

みなで一冊の本やエッセイを読み、共通のテーマについて考え、議論する。今はこのような時間がとても重要なことに思う。

2020.4 コロナ禍の中、人に会うことについて、生活について考え直し、これからどのように行動していくか考えていた。

他者の日々の過ごし方を聞いたり、情報交換したりすること不、自分が安心していたように思う。

2020.5
・小野和子さんのDVDを見る。
・「他者の苦しみへの責任」を読む。

心を掘り出す作業＝民話を聞き出すこと。語り手の語る相手への無意識に相手を合わせている。物語を語る上で自己は出る。語ることで我が出る理由はなんなのだろうか？

**pen友の物語、はぢさんの物語、私たちそれぞれの物語があるということ。
私たちのプランが、私たちの物語になる。そうか、これはそれぞれの物語なんだな、と思った。それぞれの物語が、次にどのように展開していくのか？**

苦しみの寄り添い方に正解はない。

本を読んでいて、内容を理解したりする事ができるが、それが私の中に入っていく事の難しさを感じた。**本を読めば読むほど、簡単に共感するとはいえなくなっていった。
私が育ってきた環境とはあまりにも違い、共感とはどういうことか、本当に共感することはできるのか、考えるようになった。**

2020.5
母と喧嘩になる。

私も母もいた頃のおばあちゃんの記憶について話をしたとき、喧嘩になった。
お互い喪味な記憶の中で、正解のないいい合いをした。そのときは自分の記憶が絶対だと思い込んでいて、母が何かいえば、「え、違うよ!」という感じで反論した。**私から見るおばあちゃんと、母から見るおばあちゃんは違うんだ、とやはわかる。正解、不正解ではなく、その記憶自体が、大切なもの。**

「新編つぶやきの政治思想」
（李静和/岩波現代文庫/2020）を読む。

20200527
（「つぶやきの政治思想」からのメモ）

”分からないこと、分かっては分からないこと、消費するのではなく咬受しなければならないこと、それは語る私に、聞く良者に、最心地悪さを残す。だが、いったん身に入った瞬間から、解釈することを拒否しなくてはならない、それが生きる場だから。

”それを語るには、消費されない言葉、生き方における選択につながる言葉を見つけなくてはならない。”

”一番気をつけなくてはならないのは特殊化してしまうこと。語られる事柄、あるいは語るという行為を特殊化しないようにしたい。語ったあと、聞いたあと、どう生きるかという問いを忘れないために。”

”答えを見つけなくていい、問いとして残す。問いを見つける。
名付けられるのを残してもしょうがない。名付けられるのでなくてもいい。”

（李静和/新編つぶやきの政治思想/岩波現代文庫/2020）

いろいろな本を読んだあとだと翻訳の仕方が変わると思う。
最後にもう一度、個人的に冊子の翻訳に挑戦したい。
日本では「慰安婦」という言葉さえ認められていないことを初めて知った。
但しなくてはならないこと、但したくないこと、どう歩み寄っていけるのだろうか。
友達にとって今回の記憶はどういう記憶なのだろうか。
友達の記憶を聞いた、そのあとのことも考えていかなくてはならない。

20200328
（「つぶやきの政治思想」からのメモ）

”言語化の結果セラピーになるという意味ではかつての日本の身の上話でも韓国の身世打令でも同じだが、こうした伝統的な行為がセラピーとどう違うかというと、セラピーにおいては自分が所可能であり、自我を投影し、反省し、前後の状況を意識の上に把握する、その結果自分自身が浮かび上がる、浮かび出る、つまり明らかになる、それに対して韓国の身世打令みたいなものはすべてを語るのではなく、すべてにつながるひとつのことを反復する、反省というより反覆、自己の批判的対象化というより、今で生きてこれた自分自身を慰める、あるいは今生きているよとはのめかす、ため息のようなもの、この場合、分析はけわわないし、想起するとは同時に記憶をさらに深くからたにしみこまる、そこには過去を乗ったしはさらを炒つ為に作っている、今まで生きてこられたということを、自分の中に定当化する”
（李静和/新編つぶやきの政治思想/岩波現代文庫/2020）

「身世打令」
調べてみたら「身世打鈴」という言葉も出てきた。同じ意味なのだろうか。
「身世打鈴」は韓国（朝鮮）語で「シンセターリョン」。
「自分の身の上話を歌うように語る」という意味をもつ。
小野和子さんのいっていた、「身体な経験子として来た夫が自分の状況を語るとき面白おかしく語る」という話を思い出した。

20200529
（「つぶやきの政治思想」からのメモ）

”詩人でもある著者のそのような言葉の拾に、密かな私的記憶の場をたどることを促された時間が、かつてあった、思いがけずに浮上した記憶の蘇りに出会う。”
（李静和/新編つぶやきの政治思想/岩波現代文庫/2020）

はじめは友達の住んでいた場所を話れること、その記憶を私がどう聞けるのか、その記憶を私がどう聞けるのか、どんな事えながら読んでいた。
でも、そのうちもうひとつ浮かび上がってきたものがある。
そのとき、この浮かび上がってきたものが自分の中では腑に落ちていないものだと気付いた。だからふだん言葉に置き換えたり、言葉として自分から関することができないものだと気付いた。無理に、無理に、言語化したり、まとめたり、形にする必要はないいつか話せるときがきたら話そう。
本の中のいろいろな言葉につかわれて浮き出てきたものの。
このときの気持ちを忘れないように、大切にしたい。

裏面に続く ▶▶▶

はぢさんとの対話をきっかけに、参加者それぞれが「越境」について考えはじめる。その思索を深めるために、それぞれが「探求／制作」してみることにした。

2020.1 アジア料理屋「アソクビナヤク」へ行く

2020.2 kosaten訪問。

私が思っていたプロジェクトとは、目標・達成を決め、そのなかにプロセスがあり、ひとつずつそれをクリアーしていき、そこにできた問題に対してみなで議論して、到達点に行くというイメージだった。

アートフルアクションのHPで「越境プロジェクト」の記事を見た。これまで個人で完結していた作品制作から、人と関わり合いながら作品を作ることで何かこれまでにない気づきがあるのではないかと思い、宮下さんに声をかけた。これまでと違うプロセスから作品を作るということと、「越境」ということが私の中でつながった。

思った以上にこういうプロジェクトに対し人は警戒するな、と実感した。
身近な人から話を進めていったほうがいいと思った。

私は個人的に美術のプロジェクトに対して希望を抱いていたが、いくら美術という世界共通のものでも、生活というものがかかわると、人はそんなに簡単に参加するといえないし。警戒することがわかった。私は美術家として作品を作っていし、周りにも作品を作っている人が多かったので、プロジェクトに関して興味を持ってくれるものだと思っていたが、もう少し客観的に見ないといけないんだな、と思った。今後の制作に関しても、人がどう感じるかをもっと考えないといけないなと感じた。
私は海外経験がない。異文化の人とあまり接してきていない。接し方ひとつにしてももっと考えるべきことはたくさんあるんだなと思った。

pen友プロジェクトで、文通依頼をするにあたってプロジェクトの意味やコンセプトをもう一度考える。

手紙は伝えるという力が強い。

pen友を探していたときに考えたこと

このときに、海外から移住してきた方とこのプロジェクトをやることは難しいと痛感した。

今自分たちがやっている越境のプロジェクトとは少し違うのかな、と思った。

（kosaten（http://kosaten.org/ja/））
田制、野澤、森山がkosatenを訪問し、pen友プロジェクトの説明を行う。
それに対し、以下の問いを受ける。

- 参加される方のモチベーションはどこにあるのか？
- 文通という、対1人、対個人で行うことをパブリックにする意味は？
- 個人的に話したり、伝えたりしたいことはあるにしても、必ずしもみなに伝えたいということではないのでは？
- 文通するためには、まずは人間関係を構築する必要があるのでは？
- 「女性限定」という言葉の範囲は？

感想：
- kosatenは様々な人が訪れる場所だった。
- 自分の価値観や偏見や立場などを深く考させられた。
- 自分の発言によって誰かを傷つけるのではないか、という怖さを感じた。
- 自分がいかに限られた世界の中でしか生きてこなかったのか、思い知らされた。
- pen友プロジェクトでは、人の考えや記憶、言葉などが交差する、それによりどこだけ相手を想像し、その相手の存在を以前より身近に感じる、そういうプロジェクトだと思った。

**もう一人、友達のオキさんにこのプロジェクトに参加しないかと聞いてみた。
ウィーさんはイメージ通りの楽しいおばあさんの話をしてくれた。でもオキさんの話は違った。「おばちゃんの旦那さんは朝鮮戦争でこくなって、おばあちゃんはアルコール依存になった。あまり楽しくない話だから、このプロジェクトにそぐわないかもしれない」といわれた。**

歴史を知らなければ、と思った。

歴史の語りかたとは

2020.2 pen友のことを説明するために、友達に連絡を取って会う。

「ハルモニの唄――在日女性の戦中・戦後」
（川田文子/岩波書店/2014）を読む。

2020.3 川田文子さんの本、小野和子さんの本を読む。

川田さんの本を読んで在日韓国人のおかれていた状況を初めて知り驚いた。
私の周りにも在日〇世の人は何人も居たが、この様な過去の上に彼らの生活があったのかと思うと、その人達はどう日本や日本人を見ていたのか、疑問に思う。
他者の苦しみを想像することの難しさを感じていた時期。他者の苦しみを理解する前に、自分のことをちゃんと知ろう、と思った。

2020.4 母にインタビューをしてみることにする。

/2011）を読む。

母に、おばあちゃんのことを聞いてみた。
「ウネばあちゃんのことを調べてるプロジェクトをやっているから、おばあちゃんのこと教えて」最初におばあちゃんの年表がつらつら出てきた。
お母さんが関係していないときの話が多かった。自分が絡んでくると、話しにくいのかもしれない。それとも、自分の姉相手だと話にくかったりするのか。

おばあちゃんの浴衣の話を聞いた。

祖母の話を聞いた。前から知ってることもあったが、知らないことも多かった。
祖母本人に直接聞いてみたかったが、それは叶わない。

ベルリンにいる韓国出身の友達と連絡を取る。「子供の頃棒玉に住んでた。今どうなっているか気になる」と友達がいう。小野和子さんの、「物語の採訪」とつながる気がする。

2020.5
母と喧嘩になる。

私も母もいた頃のおばあちゃんの記憶について話をしたとき、喧嘩になった。
お互い喪味な記憶の中で、正解のないいい合いをした。そのときは自分の記憶が絶対だと思い込んでいて、母が何かいえば、「え、違うよ!」という感じで反論した。**私から見るおばあちゃんと、母から見るおばあちゃんは違うんだ、とやはわかる。正解、不正解ではなく、その記憶自体が、大切なもの。**

「新編つぶやきの政治思想」
（李静和/岩波現代文庫/2020）を読む。

翻訳中に出てきた、「歴史的身体」「身体的記憶」という言葉が印象に残った。今はまだピンと来ていないが、このプロジェクトを進めていくうちにわかってくるような気がしている。

2020.1 宮下さんに、このプロジェクトの骨格を整理してみようといわれ、関をかいてみる。
アーティストとスタッフの関係、参加者とスタッフの関係、小金井の街との関係について考える。

2020.2
pen友の説明をしにkosatenへ行く。

教科書は、国、世代によって書かれていることが違う。それぞれの国、世代別の教科書に載っている世界史を読み比べてみたい。私たちの国にある、歴史関する常識がどこから来ているのか再確認してみる。

冊子「越境/越えようとすることで見える境の相をめぐって
pen友プロジェクト　わたしたちの原風景を描くために」完成。

2020.3
宮下さんとはぢさんが書いた冊子の翻訳を始める。

翻訳する文章を読み進めていく意味をよく理解できず、あまりはかどらない。**二人とも、あることを表現するためにいくつもの言葉を羅列する。ひとつの言葉では表現しきれないものごとがあるから、様々な言葉を並べるのだろうか。**

ひとつの言語からもうひとつの言語へ。日本語ではなんとなく通じる曖昧な表現が、英語にはなかったりする。書いた人が何を思ってその言葉を書いたのか使ったのか知る必要があるのだと思う。「越える」という言葉ひとつをとってもいろいろな訳し方がある。日本語だと「越える」という言葉からいろいろなことを連想することが可能だが、英語だと、読んだ側に何を連想させるか、通じないといけないのだと思った。

はぢさんへ送った手紙はまだ届かない。
どこにいるのか。海へ落ちたと想像する。

20200523
（「他者の苦しみへの責任」を読んで）

”他人の痛みを理解できないのは、理解力の欠如によるのではなく、霊的な能力の欠如によるのである。想像の世界では、他人の痛みは、言語ならびに身体に距離感を求めている。”
（ヴィーナ・ダス、他/他者への苦しみへの責任みすず書房/2011）

→霊的な能力の欠如とは？
霊的な能力の欠如、それが自分の置かれた状況から来ているのであれば、自分の置かれている状況を見極めたりすることで、この霊的な能力の欠如、から脱することはできるのだろうか。
自分が苦しめられているように、自分は社会の枠の中に入れられているから、そのことがその欠如に一つながっているのであれば、そもそも、自分が置かれた状況、ということを通じて、この苦しみ、の欠如を補あうと動いたら、他人の痛みを、想像だったとしても、共有することができるのか？

”しかし我々が人間として生きていくためには、言語が役に立たないという技術感に立ち向かっていく必要がある。私の痛みがあなたの身体に宿るというウィトゲンシュタインが述べた例は、痛みが共有されることは「想像上」あり得るが、経験されることはないという事を示しているように思われる。その場合、言語は痛みの世界にきちんと関われていない。”（ヴィーナ・ダス、他/他者への苦しみへの責任/みすず書房/2011）

→言語が役に立たないとき、これを補える（？）のが表現と想像力なのだろうか。（補う）という言葉の選択が正しいのか不明だが。）

ボーランドに行ったとき、アウシュビッツとトレブリンカに行った。両方チェスの強制収容所があった場所。アウシュビッツは今も多くの建物や骨が残っていし、入るときは大体ガイドアーに参加する。当時の状況が事細かに書かれている。言葉や説明で、当時の状況をいろいろと理解することができる。トレブリンカは違で、ナチスが証拠隠滅のために本ごと焼滅していたためあとには何も残っていなかった。ただのだだっぷい野原と森。ただに出現する引き込み越の跡、あとから作られたユダヤ式のお墓。かつて死体を埋めるために掘られた大きな穴の跡。でも全て綺に置われていて、一見するとただの自然。そこを歩くのもガイドなしで、情報もあまり書かれていない。ただと、トレブリンカの方が、歩きながらいろいろ想像することができた。自分が今歩いている場やなな原っぱは、かつては収容されていた人たちが歩いていた場所だったんだろうか、、、

時間の流れ ►►►

pen友プロジェクトPhase2
「1通の手紙からはじまる物語」と4冊のノート。

4冊のノートがめぐりはじめる。

展示、『「おばあさんのくらし」記憶の水脈をたどる』。

2020.6 **いろいろと考えてミーティングに参加させていただこうと決めた。**

（九州大雨。）

この期間に妊娠が発覚。心身ともにパニック状態。自分で感情がコントロールできなかった。心の浮き沈みが激しかった時期。自分の展示もあり、越境／pen友プロジェクトは休んだ。個展もあり、越境／pen友プロジェクトではプランを考え、と緩やかな混乱状態だった。

コロナが蔓延し、大人数はもちろん、友人、家族とすら食卓を囲み話すことが困難になった。並べられたものを共に食すという行為はコミュニケーションの場において大切なことだったことに気づいた。「味」にも時代や家庭環境など様々な側面が見えてくる。

2020.7 写真はあまり抽象的ではないものにしようと思い、ヨゼフ・ステックの写真に決める。

2020.6 「食」ということについて考えはじめる。食べるということ、食卓を囲むということについて。

「越境読書会」、みなで読む素材の選択、そして会の進行役をおおせつかる。初めてのミーティング。途中からの参加ゆえ、みなさんとの会話に少しずつ追いついていこうと思う。どんな写真にするか？

今回のプロジェクトや、コロナのこと、小野和子さんの物語の話から、寄り添い方、ということを考えた。
コロナが流行っていた時期。第一波のとき、何がどうなるかわからない状況。人と会って気を紛らわせることが正解でもないし、声をかけ続けることも正解ではない。ほっとけばいいという問題でもない。人との距離感、寄り添い方に正解はない。これをやっとけばいい、というものはない。いろいろな乗り越え方があるんだなと気づく。

初めて見る写真に対してそれぞれの経験値から想像し感想を出し合う。みな違う感性をもっていると改めて感じた。年代の違いからも新しいものが見えてきたように思う。キーワードは「目線」？

小野和子さんのDVDを観る。
《トークセッション「物語る人」[DVD]/仙台メディアテーク所蔵/2015》

自分がわからないことを受け入れよう、わからなくても考えていこうと思った。

私のことや実家について考えながら、それを人に話すことは初めてだった。私は自分の生活が当たり前だと思っていたが、他の人からするとそれが当たり前ではないということが実感できた。

人に何かを伝えるときに、本当にその人がいいたいことを見つけ出すのは難しい。
ミーティングのために議事録を書いたが、言葉の選択と意訳をするのはとても難しかった。人の話を聞いて、それを伝えることは大事だが、難しい。感じ方の違いを当たり前だととらえ、その中で共に暮らしていくことが大事。コロナ禍ではそれが世界的に必要。

2020.6 自分の年表を作ってみる。

経験/記憶をシェアすること

母は自分が覚えていないことをすごく気にしている。記憶はとても曖昧で、思い出そうとすると、何が本当か、わからなくなる。
記憶の正誤性に悩んだが、みな話したからそれは問題ないといわれて安心した。曖昧なまま記憶でよいと。

本を読むのがこんなに難しいとは思わなかった。辛かった。わからないことがわからなかった。自分の中で理解できないことを、どうしていいのかわからなかった。

埼玉に行こう。友達の住んでいた場所を探しに。今はダメだろうか。

多角的に自分の意見を考えよう。
知らないところで起こっているでき事にどう出会えるのか。
知った上で何をするのか。

「つぶやきの政治思想」のある部分が特に自分に刺さる、そのあとみなでした会話も、息いてその気持ちに整理をつけたり、言語化する必要はない、とこの本を読んで思う。

私にとって「作品を作ること」とは、極端にいってしまえば、自分がここにいることの証明のような感じだった。無理に作らなくていいよ、といわれたとき、肩の荷が下りた。今まで、出産するとしばらく作れなくなるという焦りがあり、その前に何か残さなくては、という気持ちがあった。「無理して作らなくていいよ」という言葉は、今後の制作活動、生まれてからもうまくいくかわからないから、のんびり作れればいいかな、と思うようになるきっかけになった。

2020.8 作品を作ることに関して宮下さんとミーティングをした。
プロジェクター、ライトボックスを使って当時撮影したモノクロネガフィルムを透過させることに決めた。

作品を作る事に慣れていない自分が作品を作る上で、アーティストである呉さんが作品を作る過程を間近にみることができた事で多くのアドバイスをいただいた。

ふたたび何かを越えようとしている自分。今その時点に立っている自分。プロジェクトに参加したのも自分から動き出さないと、自分の前にある何かを越えることができないと思ったからだ。

「詰め込むことのリスク」というはちさんの言葉が印象に残った。

それぞれが作品を作っていく過程や、
それに対するみなさんの意見を聞く。

自分が伝えたいことは何か？自分が何を考えているのか？ それを作品にするとはどういうことか？展示に参加をしてみたいが考えがまとまらない。

自分のおばあさんのことを、新聞のように書いてみた。

理解や共感。私の感覚では、理解や共感とは、相手の気持ちや感情や事実を口の中でガリガリ噛み砕いて体の中に入れ、それが少しづつ溶けていくことだと思う。そう思ったら少し楽になった。

2020.7 はちさんの制作の方向性が決まり、4冊のノートをいろいろな方に巡回し、おばあさんの暮らしの記憶を書いてもらうことになった。

2020.8 自分の作品をどのようにすすめていく考える。

いろいろなものに触れ、いろいろな記憶が呼び起こされ、接点がないように思えたものが繋がりはじめる。

「路地へ　中上健次の残したフィルム」
《青山真治/紀伊國屋書店/2002》を観る。

私がよくて作る側として友達に協力してもらいながら、作っていくのか、それとも友達と共同で、ひとつのものを作り上げていくのか、決めなくてはいけないことだと思うが、まだ自分の中でそれがはっきりしない。

「路地へ」を観る。淡々とした映像、無言が多いところが、見ている側にもいろいろなことを思い浮かべる余地を与える。基本的に目的地に向かう車の中から、流れゆく外の風景を撮影している。たまに車の外から、先へ進む車の映像。自分がトライブレコーダーで撮影した埼玉までの道のり映像をどう使っていくか。考えさせられる。道を進む映像は：割と普遍的なもの。見る人それぞれが自分の中にある「道を進む」記憶を思い返しながら、この映像を見るのではないかと思う。

2020.7
トライブレコーダーで道のりを撮影しながら車で埼玉へ行く。
「路地へ」を観る。

2020.7
11月に向けて、本格的な話し合いを行う。

2020.8 二度目の埼玉へ。友達とwhatsappでビデオ通話しながら。
友達が車の進行方向が見えるような形で携帯を設置した。**「そこにはいないけど、助手席に乗っている感じがする」と友達がいった。埼玉まで、一人で行ったときと同じルートをたどるが、今度は友達と話しながら行くことで、全く違う景色が見えてくる。**

福島さんと制作の話をする。福島さんには、写真というものを撮る理由がある。その行為が彼女の身体とマッチしているのだと感じた。私は？今回、映像を使うことに関し、改めて考えさせられる。**映像を使うことの必要性は？視覚的な情報は、想像力を妨げる可能性もある。耳から入ってくる情報の方が、自由だったりする。**

（ほぼ完全出勤となる。）

カメラ、ライトボックス、三脚など、以前使っていた機材をゴソゴソ探し出す。
早々ネガの整理、チェックをすると、**ビネガーシンドローム**が始まっていることに気づく。保管状態の悪さ、**それだけの年月が経過したことを改めて痛感。**

マクロレンズを購入。

モノクロネガ複写作業。
ネガをマウントする。

ライトボックスが完成する。

ライトボックス用フィルムの配置を考える。

シャトーで実際にプロジェクターとライトボックスを置いてみて、展示の位置や機材の動作などを確認調整。

ライトボックスの制作を友人の知り合いに頼む。
口頭でイメージを伝え、彼にそれを絵にしてもらうことで、具体的な空間が立ち上がる。そこでの他者の役割は大きい。**他者がいることで、多方面への拡張が生まれる。**
田制さん、野澤さんの協力関係とはまた違った関係性。

2020.10 展示広報活動。

2020.10 はちさんとオンライン面会。
心が繋つこの時期にじっくりと何かに向き合う時間はとても大切なことだと思った。

2020.9 オーストラリアから送られてきたはちさんの文通を元にしたノート記載への参加者を探し始める。金沢で古書店をやっている友人と、帽子作家の方に快くお引き受けいただく。

2020.11 展示会期中プロジェクターが映らなくなるトラブルがあったが、それ以外は問題なく終了。

何かを考えるとき、同時に作品を制作することで、自分を客観視し、考えを整理することができる。制作経験の有無は問題ではなく、それぞれがそれぞれのバックグラウンドから何かを立ち上げていくことが重要。長い時間をかけ、みなで同じテーマについて考える行為、週1回のミーティングを欠かさず続けてきた経験が、このプロジェクトの根幹になっていると思う。

多分、若い頃の自分がこの作品を作っても面白く感じなかっただろう。数十年の年月、間隔、積み重ねがあったからこその、この作品だ。

自分とは関係がないと思っていた問題やできる事が、アプローチの仕方によってより身近なことに感じられ、その本質に近づくこともできるのだなと感じた。

**野澤さんの展示を手伝う。
自分が今までやってきた方法とは違う展示方法を考えた。
今までプロジェクトを一緒に積み重ねてきたからできたこと。**

周りの人たちの作品が立ち上がっていく瞬間に立ち会えたのは、嬉しかった。

今回は、はちさん中心のプロジェクトであったのと、私自身プロジェクトというものへの参加が初めてだったのもあり、どういうスタンスで参加していけばいいのか最後まで悩んでいた。結果としては作品を作らないということになったが。

何かを作ることは自分と向き合うこと。結構しんどい。

ノートに私のおばあさんの記憶を書くことになり、おばあさんのことを思い出す。おじいさんが撮ってきた写真を見直す。

コロナ禍、人はあまり来ないと思ってたが、たくさんの人が来てくれた。人が人を呼んだと思う。ノートを書いた人の紹介だったり、田制、野澤、福島、森山の知り合いだったり。

金沢の友人からノートが戻ってくる。**会えないけど、それぞれの場所で自分のおばあさんについて考え、それをノートに書いてくれているんだと思うと新しい繋がり方を感じる。**

作品を作ることと、展示をすることが、今回のゴールではなく、それぞれに自己の思索を深めながらそれぞれに影響し合う過程が大事。いろいろな参加の方法がある。ノートにおばあさんの話をかく、ということも関わり方のひとつ。

妹がノートに書いたおばあさんの話は、
私がもっているおばあさんのイメージとは違っていて、面白かった。

おばあちゃんが作ってくれた浴衣はまだ見つかっていない。それでもいいかな、と思った。

実際に展示をしてみたら、私の表現したいことが明確になった。

教科書に出てくるような、歴史上の人物と自分とのつながりを感じたことはなかったけれど、あるノートを読んで、全て自分と地続きでつながっているのだな、と思った。

ノートについて考えたこと

展示期間中、私の伝えたいことが明確になり、言葉としてでてきた。作品の意味や説明もできるようになった。とても不思議な感覚だった。

2020.11 シャトーに展示をした。

はちさんのノートを見て、アイディアが作品になるとはこういうことかと感動する。

ノートが回り始めている。青森から東京に越してきた親戚にノートを送ることにする。あまり連絡を取っていなかったが、ノートを送ることをきっかけに、連絡を頻繁に取り合うようになる。

2020.10
展示について考える
栃木に写真を撮りに行く。

ノートを誰に送ろうか、と迷う中で、いろいろな人の顔が浮かび、その人は今どのような生活を送っているのだろうかと考える。このプロジェクトをやっていく中で、繰り返し経験したこと。手紙でも送ってみようと思う。

親にも親の生活がある、というのは生々しい。親は、子である自分としか生きていない、とある時期までは思っていた。でも母じゃない一面も見た。私のお母さんじゃなくて、一人の人としての人生があったんだと気づいた。母を初めて、一人の人として認識した。

2020.9 人に何かを伝えるとはどういうことか考えながら、展示について思い巡ります。

展示をしようとはじめてみたら、思っていたより壁が大きく、写真の枚数が足りなかった。初めての展示だった。何からやればいいとか、こんな展示方法があるとか、田制さんがいろいろな選択肢を提示してくれた。私はその中からピンと来たものを選んでいった。

どう展示するべきか、最後までわからなかった。展示をすることも、最後まで迷った。

家の開取りを中心にその周りに、
実際の記憶にある風景やものやでき事を書いていく。

友達の記憶を「消費」しない方法。

おばあちゃんの実家がある栃木へ10年ぶりに行った。
畑の大きさ、道、広さ、何もかもがイメージと違い、ショックだった。これも記憶の違い、母の記憶の違いも、私の記憶の違いも、写真を撮りに実際に栃木に行ったときの記憶の違いも。「記憶が違う」ということが驚かり、何か意味を持った瞬間だった。とりあえず、写真をたくさん撮った。

人の情念だけでは、作品にはならない。

作品なんてできるのだろうか。

考えるのをやめたいと思った。もう無理だと思った。そんなとき、宮下さんに考えることをやめたらダメだといわれた。何かが吹っ切れた。
これからは自分のペースで行こうと思った。11月に作品展をするのは決まっている。こんな短期間で、自分の物差しができるわけないと思ってたので、自分のやりたいようにしようと思った。

解体されていく団地が建てられた1960年代、その頃の日本について考える。どの団地の建設業法・工事設可告示掲示板にも「アスベスト」の文字があった。友達は昔古い団地に住んでいたそうだ。その団地の隣り場で遊んでいたそうだ。友達はベルリンの自宅から、私は友達が前遊んでいたかもしれない団地の階段に座り、電話を通して二人で家族の話をした。

毎日変わるギャラリー番の人が、それぞれの言葉で各作品を説明しているのを聞いた。
いろいろな人の言葉で語られるこのプロジェクト、展示が終わってやっと、他者の言葉を借りながら、自分がやってきたことも言葉にすることができてはじめている。とてもいろいろなところを行き来した。物理的にも、精神的にも、思考の中でも、過去にも。この先、今回の経験を辿りなおすためにも、またいろいろなところを行き来するのだと思った。

2020.11
シャトーの地下から椅子を持ってくる。

2020.10
・福島県福繁町へ行く。
・解体中、もしくは解体されそうな団地を回る。
・三度目の埼玉へ、友達とは現地集合（電話）。

2020.9 古いwalkmanを発見。モノラル。

・シャトーの地下にあった椅子
柳宗理が1964年東京五輪のためにデザインし、商品化したFRP製の椅子。

・シャトー小金井
1974年に黒川建設により建設された
高級マンション。

・カセット・テープレコーダー /プレスマンTCM-100
1978年に作られたウォークマンの原型。

・FRPの椅子
現代生活のニーズを満たすように計画された
安価で量産型の椅子。

親族にノートを送った。「作品の一部になるのね」といわれた。「プロジェクトに参加してください」というふうにノートを渡したくなったが、私が美術をやっていると親族は知っているので、その前提を覆すのは難しい。

2020.9
フレスマンTCM-100
（モノラル）

「聞くこと」で想像できるかもしれない映像。その方が豊かで幅広いのかも。
目で見てしまうより、聞くことによって喚起されるものは多様。

2020.9
（ベンチ）
「3ヤ人のフリーハリヒはデートする女の子ができました。
その女の子はドイツ人。
ある日のデートのこと、歩きつかれた彼女は緑色のベンチに座ります。
でもフリーハリヒは座れません。
なぜならこ3ヤ人は黄色いベンチに座ならければいけないと決まっているから。”
（ハンス・ペーター・リピター／あの頃はフリーハリヒ/リピター作いた/岩波書店/2003）

2020.10
・福島県福繁町へ行く。
・解体中、もしくは解体されそうな団地を回る。
・三度目の埼玉へ、友達とは現地集合（電話）。

2020.11
（団地について）
友達は団地に住んでいた。私も昔は団地に住んでいた。
1960年代に建てられた団地の多くは、現在進行形で解体され、改築されている。

“団地には日本が元気で希望に満ちていた時代に見た夢が凍っている。
1960年代、団地族という言葉が流行した当時、団地は都会的な新しいライフスタイルの象徴で、憧憬のめだったと。今はどうだろうか。”

“すぐそばに迫った2020年東京オリンピック、前回の東京オリンピックが開催されたのは約半世紀前の1964年。日本が高度経済成長期真っただ中で、豊かな国、明るい未来に向かって突き進んでいた時代だった。”

“2020年東京オリンピック、2025年大阪万博、日本はどこか、まだかつて見た夢の続きを引きずっているのかもしれない。”

（Yuki Kanaitsuka / 「団にとっては、日本にビジョンがあった時代」。
平成から令和へ。ある写真家が撮ったマンションが「団地」に注目する理由
/ NEUT / https://neutmagazine.com/interview-cody-ellingham）

2020.10
（つぶやきの政治思想からのメモ）
“植外的な言葉たちを統合しないこと　そしてそのままそれを並べて配置する
現実との接近を狙うことなく　形態にしない　形態にするために試みしないこと”
（李静和/新編つぶやきの政治思想/岩波現代文庫/2020）

ものごとの意味や理由について考えながら、筋道を立て、整理しようとしすぎるときにいつも陥ってくるものごの言葉だ。整理することはときには必要だが、それと同時に溢れてしまうものはまゃある。溢れるものがある、という言葉を持ちながら少しずつ整理しよう。

2020.11
ベンチにとる材料を探していたら、福島繁華町の知り合いから、解体された民家から出た古材があるので、いらないから、という連絡が来る。2年ぶりに福繁町に行くチャンスになる。古材を車に積み、東京へ車を走らせながら、福島と東京の距離について考える。
こんなに距離にこの古材を東京に持ち帰っていいのだろうか。
滞在中、東京目線で福島を語る人がいる、という話を聞いた。年の初めの方に考えていた「同情」や、親訳中に宮下さんと話し合った「自己満足」という言葉を思い出す。
自分は「東京目線」になっていないだろうか。
福島と東京の距離を物理的に経験しなければ、と地域に思う。今度、徒歩でこの道のりを歩いてみたい。

2020.11
（つぶやきの政治思想からのメモ）
“植外的な言葉たちを統合しないこと　そしてそのままそれを並べて配置する
現実との接近を狙うことなく　形態にしない　形態にするために試みしないこと”
（李静和/新編つぶやきの政治思想/岩波現代文庫/2020）

2020.11
（ベンチ）
「3ヤ人のフリーハリヒはデートする女の子ができました。
その女の子はドイツ人。
ある日のデートのこと、歩きつかれた彼女は緑色のベンチに座ります。
でもフリーハリヒは座れません。
なぜならこ3ヤ人は黄色いベンチに座ならければいけないと決まっているから。”
（ハンス・ペーター・リピター／あの頃はフリーハリヒ/リピター作いた/岩波書店/2003）

2020.10
（つぶやきの政治思想からのメモ）
“植外的な言葉たちを統合しないこと　そしてそのままそれを並べて配置する
現実との接近を狙うことなく　形態にしない　形態にするために試みしないこと”
（李静和/新編つぶやきの政治思想/岩波現代文庫/2020）

2020.9
（ベンチ）
「3ヤ人のフリーハリヒはデートする女の子ができました。
その女の子はドイツ人。
ある日のデートのこと、歩きつかれた彼女は緑色のベンチに座ります。
でもフリーハリヒは座れません。
なぜならこ3ヤ人は黄色いベンチに座ならければいけないと決まっているから。”
（ハンス・ペーター・リピター／あの頃はフリーハリヒ/リピター作いた/岩波書店/2003）

2020.9
（つぶやきの政治思想からのメモ）
“植外的な言葉たちを統合しないこと　そしてそのままそれを並べて配置する
現実との接近を狙うことなく　形態にしない　形態にするために試みしないこと”
（李静和/新編つぶやきの政治思想/岩波現代文庫/2020）

2020.9
「聞くこと」で想像できるかもしれない映像。その方が豊かで幅広いのかも。
目で見てしまうより、聞くことによって喚起されるものは多様。

2020.8
（つぶやきの政治思想からのメモ）
“植外的な言葉たちを統合しないこと　そしてそのままそれを並べて配置する
現実との接近を狙うことなく　形態にしない　形態にするために試みしないこと”
（李静和/新編つぶやきの政治思想/岩波現代文庫/2020）

2020.7
（ベンチ）
「3ヤ人のフリーハリヒはデートする女の子ができました。
その女の子はドイツ人。
ある日のデートのこと、歩きつかれた彼女は緑色のベンチに座ります。
でもフリーハリヒは座れません。
なぜならこ3ヤ人は黄色いベンチに座ならければいけないと決まっているから。”
（ハンス・ペーター・リピター／あの頃はフリーハリヒ/リピター作いた/岩波書店/2003）

2020.7
（つぶやきの政治思想からのメモ）
“植外的な言葉たちを統合しないこと　そしてそのままそれを並べて配置する
現実との接近を狙うことなく　形態にしない　形態にするために試みしないこと”
（李静和/新編つぶやきの政治思想/岩波現代文庫/2020）

2020.6
（ベンチ）
「3ヤ人のフリーハリヒはデートする女の子ができました。
その女の子はドイツ人。
ある日のデートのこと、歩きつかれた彼女は緑色のベンチに座ります。
でもフリーハリヒは座れません。
なぜならこ3ヤ人は黄色いベンチに座ならければいけないと決まっているから。”
（ハンス・ペーター・リピター／あの頃はフリーハリヒ/リピター作いた/岩波書店/2003）

**2020.6